



杉山 彰

「言霊量子論」と銘うっているにもかかわらず、いっこうに量子論的ではないじゃないかという叱責は叱責として、しばらくは、そこはかとなく、漂わせて、お話をさせてください。で、今回は「実現力」についてです。以前、小野寺さんが、10月の全体会議の前に「完全であることの自覚」というレポートをされました。不思議なことに、私も同時共時に同じことをイメージしていました。題名は違うのですが、言っている内容はほぼ同じです。＜「実現力」について＞、お楽しみください。

発想の転換を大胆にしてみようと思う。人間が人生を生きていくうえで不可欠な、さまざまな知識は、そのすべてを生まれたときから誰もが同じだけ持っているとする。しかも、人間は望めば何でも実現できる能力を持っているとする。もちろん、言うまでもなく、この大胆な発想の転換はたちどころに非難号号の嵐の中に巻き込まれる運命にある。しかし、ここでは、あえてその運命に逆らってみたい。

まず、非難号号の第1関門はそんなことを考えること自体がバカげていて、議論も何もする気がないとする人たちがいることである。いいでしょう。まず、この事実によって、筆者である、私の発想の転換をまったく受け入れることができない人間と、私を含めて受け入れることができる人間の両極端が存在することが明確になったといえる。

そして、非難号の第2関門。この非難号の内容は正確に予想ができる。それは、人間は生まれたときに持っている知識は、本能以外の知識はゼロであり、成長するにしたがって教育や経験や学習などで増やしていくものである。したがって努力や集中力や周りの環境の違いによって、人間が獲得する知識には個人差が生まれる。それが証拠には、人間には、頭がいい人間もいれば、頭が悪い人間もいる。天才といわれる人間がいれば凡人といわれる人間もいる。さらに才能があるといわれる人間もいれば、才能がないといわれる人間もいるではないか、と。反論の余地はまったくない。しかし、冒頭に述べたように、この項では発想の転換を大胆に試みることに意味と目的と価値があることを再認識していただきたい。

くどいようだが、人間が平均して80年以上の人生を生きていくうえで不可欠な、さまざまな知識は、そのすべてを生まれたときから誰もが同じだけ持っているとする。しかも、人間は望めば何でも実現できる能力を持っているとする。もし、この大胆な発想を受け入れた人がいたとする。

そこで確認しなければならないのは、その人が、その事実、自ら気づくことができたかである。そうでない限り、いずれ、自分に能力があるかないか、それができるかできないかで悩むことになる。まだ、やってもいないのに、すでにやった後の結論を自分で出して悩んでいる。「自分には能力がある。望んだことは何でも実現できる」。このことに気づくことは、自信に満ちることでもある。自信に満ちることは、他人の思惑はまったく無関係である。本人が本人を自分自身で評価できたかできないかだけの問題である。「やってみようできるに違いない」、と行動を起こすことである。たとえ挫折しても、自信が揺らがないければ、何度でもやり直すことができるのである。この繰り返しをやって、寂しい人生を送ってしまったという話は、いまだに聞いたことがない。

ちなみに広辞林では、<自信とは、何かを成し遂げた結果における本人の評価である。他人の評価や意識は無関係なのである。また、確信とは、何かを成し遂げた結果を、本人が評価し、他

人からも評価されたときの結果としての、本人の意識である。さらに、才能とは、何かを成し遂げた結果や、その結果の蓄積における他人の評価であり意識である。才能があると言われた本人の意識は無関係である>と定義されている。

さて、前置きが長くなってしまったが、次に必要なことは、すべての知識を持っていると気づいたら、その知識のひとつひとつを確認していくことである。なにしろ、DNAが遺伝情報として蓄積した経験知は、2016年時点で46億年分。これは簡単に確認できる量ではない。時間がかかる。

しかし、ここで理解してほしいのは、<確認>と<覚える>とはまったく違うことである。<確認>は、もともと持っているものを、「そこにもあるよ」、という具合に教えてもらうことである。その結果は、「あっ、そうか。気づかなかったよ。ありがとう」である。確認は、瞬時に理解できることであり、そのコミュニケーションの結果は、いつも相手に対して感謝の気持ちで終わる。コミュニケーションの輪が広がるのである。オープンになる。<覚える>は、自分が持っていなかったものを教えてもらうことである。持っていなかったものを、相手から貰う結果になるのだから、純粋なビジネス関係では、料金を払わなければならない。相手に対して、お願いする気持ちがあふれる。同時に、「料金を払っているんだから、ちゃんと教えろ」とか。ときには覚わらないのは「教え方が悪いからだ」と責任転化も起こる。とにかく覚えるのは時間も苦労もかかる。だから、一度覚えたことを他人に教えることはもったいなくなってしまう。さらに、教えてしまうと、何となく失ってしまったような気がする。そのコミュニケーションの結果は、相手に対しても、自分に対しても社交辞令的になる。「ありがとう」とは言っても、心からの感謝ではない。コミュニケーションの輪は狭まっていくのである。クローズドになる。

とにかく、確認することは、時間をかけて、苦労をして、覚える必要がまったくないということである。ここが重要。確認だけをするのだから覚えるのに比べて、それこそ何十倍、何百倍も速くて

きる。確認していくのだから他人の話が素直に聴ける。聞かれれば、確認したことをすべて、包隠さず話すことができる。確認しなければならないことは46億年分と山ほどあるのだから、すでに確認したことなど大切にしまっておくほどのことではない、出し惜しみするほどのものではないという意識がつねに満ちている。確認するのだから言い争うことがない。そういう意見もあるのだ、と逆に感激してしまう。確認するのだから、確認できたら、確認させてくれた人に感謝の気持ちが持てる。

もうお気づきとは思いますが、ここでいう確認とは知識を得ることと同じ結果であり、じつは、この確認するという行為が、気持ちが真のオープンマインドの意味するところである。オープンマインドとは、知識と知識のコミュニケーションに不可欠な条件であり、相手のすべての“現実”を受け入れる行為の連続といえる。“現実”とは、その人が認識している経験知(事実)の集まりである。マイワールドなのである。つまり言い替えれば、他人が確認し終えた知識のことである。人間とのコミュニケーションによって、相手の意見を受け入れるということは、相手のマイワールドである“現実”を受け入れることと同じことなのである。そして、この関係はコミュニケーションにおいて、お互いがお互いに永遠に与え続け合うという行為につながっていくのである。

なぜならば、46億年分の知識の量は無限大だからだ。人間と人間との争いのすべては、限られたものを分かち合う過程において発生している。たくさんあるうちは、余裕に満ちた微笑みを交わし合うことができるが、残り少なくなると、人間は必ず不安と恐れと猜疑心が微笑みを打ち消していく。しかし、知識とは、人間とはいわず地球上に棲むすべての生き物が、生まれたときから同じだけ持っているものであるとするなら、そこには奪い合うという行為はいつさい消えて、与え続けるという行為が永久に続くはずである。なにしろ知識は46億年分もある、決して、一人では使いきれない無限に近い資源である。また、46億年分の知識をすべて確認するためには、人間をはじめとする、すべての生き物がヒューマンネットワークを構築し、オープンマインドでお

互いの“現実”を高速でやりとりし、DNAが蓄積した経験知を、知識として確認していかなければ間に合わないのである。何が間に合わないか。地球そのものの未来と、人間をはじめとする、地球上に棲むすべての生き物の未来である。すでに崩壊しかかっているのである。

以上

[/wpex]